

林業経済研究所創立 70 周年記念企画 リレーインタビュー⑦

私の研究史〈深尾 清造〉

聞き手：片山傑士*

藤原敬大**

日 時：2017 年 1 月 30 日・7 月 4 日

場 所：九州大学農学部森林政策学研究室

1. 経歴

◇大学入学まで

1934 年 10 月 21 日に香川県高松市で生まれた。小学生の時に大阪へ移り住んだが、太平洋戦争が始まり、奈良県へ疎開した。小学 5 年生（11 歳）で終戦を迎え、大阪へ戻った。その後、大阪府内の高校へ進学したが、引っ越しに伴い京都府内の高校へ転校した。京都府内の高校へ通学していたこともあって、京都大学を志望した。そして、2 年間の浪人生活を経て京都大学に合格すると、山や田舎が好きだったこともあり、農学部を選んだ。

◇学部時代

学部時代は文学青年であり、漱石をはじめ多くの日本作家の小説を愛読した。『チボー家の人々』や『ジャンクリストフ』、カミュの『ペスト』にも感動した。その一方で、講座派の評論もよく読んだ。部活動では、山岳部に所属していた。コース選択では山が好きだったこともあり、林学講座を選んだ。半田良一先生の講義や法学部で民法の講義を受講するなど社会科学への関心もあったが、「林学を選択したからには造林学をやるべきだ」と考えて、造林学研究室を選んだ。卒業論文では、森林土壤に含まれる窒素や炭素の化学的分析に取り組んだ。しかし、実験室での作業が主で、大好きな山へ行くのは土壤の試料を採取する時だけだった。

大学院へ進学したい、敬愛する半田先生の下で社会科学を学びたいという思いがあった。しかし、造林学研究室があった林学講座から、当時半田先生の林政学研究室があった農業経済学講座へと講座をまたいで進学することは難しかった。結果的に大学院へ進学することはせずに、静岡県庁に就職する道を選んだ。

静岡県を選んだのは、東京からも近く、多くの山や山村があるという理由からだった。静岡県庁では、山奥に点在する集落で、木炭をどれぐらい収穫しているかという調査が主な仕事だった。その一方で、大学院へ進学するため経済学の勉強もしていた。

◇大学院時代

半田先生から「大学院へ戻ってきてもいいよ」との言葉をいただき、静岡県庁を 10 か月で退職すると、1960 年 4 月に京都大学大学院農学研究科修士課程へ入学した。当時は、

*九州大学大学院生物資源環境科学府

**九州大学大学院農学研究院

主な経歴

年	経歴
1934年10月	香川県高松市に生まれる
1959年3月	京都大学農学部卒業
1962年3月	京都大学大学院農学研究科修士課程修了
1964年3月	京都大学大学院農学研究科博士課程中退
1964年4月	島根農科大学助手
1968年4月	島根大学農学部助手
1968年7月	京都大学農学部助手
1975年4月	九州大学農学部助教授
1986年5月	農学博士（京都大学）取得 博士論文の題目は「大規模林業経営の展開過程に関する研究：資本主義化の観点から」
1989年12月	九州大学農学部教授
1998年3月	九州大学を定年退職、九州大学農学部名誉教授
1998年4月	南九州短期大学国際教養学科教授、学長（1999年4月～2001年3月）
2005年3月	南九州短期大学を退職

政治闘争も活発であり、マルクス経済学に傾倒していった。奥地正氏、山田達夫氏、吉田忠氏ら林学だけではなく、農業経済学の大学院生から多くを学んだ。地代論や農民層分解論に関心があり、宇野派である大内力氏の『地代と土地所有』を5回以上読み込んで地代論の基礎を習得し、ゼミに臨んだ。また、半田先生とも地代論について真剣に議論した。奥地氏の手助けも借りながら、読んだところを同氏へ説明する形で『資本論』を通読した。

奥地氏は著名な農業経済学者であった井上晴丸先生と面識があり、「勉強のために何を読んだらよいか」を聞いてきてくれた。奥地氏・山田氏と小生の3名が中心となって、井上先生が助言してくれた文献を読む研究会を約1年間続けた。この時に古典であるレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』や、マルクス、エンゲルス、レーニンの論文を読んだ。研究会を通じて、農民層分解論に確信を持つようになり、その後につながる林業経済学に対する視点が養われた。

修士論文では、奥地氏とも議論しながら、中間的生産者層の両極分解が林業政策を規定するという問題意識を持って農山村調査を行った。発表の直前になって、近代経済学の手法も追加することとなり、徹夜で手動の計算機を使って計算したという思い出もある。1962年3月に修士課程を修了すると、同年4月に博士課程へ進学したが、2年間在籍した後、島根農科大学への就職に伴い中退した。

◇大学教員時代

1964年4月に島根農科大学農学部の助手として着任し、機構改革に伴い1968年4月に島根大学農学部助手となった。島根大学在職時には、武内哲夫氏と一緒にマルクス経済学のゼミを行った。その一方で、研究に関しては、農業会議からの委託調査や研究室が進める多くの調査に従事した。また、島根県のたたら御三家であり、大規模山林所有者である田部家、桜井家、絲原家の調査も行った。

1968年に京都大学農学部森林経理学研究室の助手として異動した。当時の森林経理学研究室の教授が半田先生、助教授が森田学氏、講師が有木純善氏であった。半田先生と一緒に山村調査を行い、農民層分解論に関する分析を担当した。半田先生は、夕食が終わっても夜遅くまで調査を行い、朝も早く起きて仕事をしていたのが印象に残っている。また、調査の報告会を半田先生のご自宅でしばしば行った。当時は大学紛争の真っただ中であり、研究室でやるとばれてしまうので、演習林の部屋を借りて学生と一緒にマルクス経済学のゼミをやった。

1975年4月に九州大学農学部の助教授として赴任した。1989年12月に教授に昇任し、林学第四講座を担当した。自分の理論の支柱にある地代論や農民層分解論、林業の資本主義化を常に頭におきながら、講義やゼミを行った。林業経済学の講義は半年間の講義だったが、資本主義経済の基礎的理論について話した。この講義には、農業経済学の学生も多く来てくれた。学生にマルクス経済学を学んでほしいのは、日本の林業政策にはマルクス経済学的な視点が必要だと考えるからだ。世界的に見ても、国連のFAOが農業の担い手は家族経営的農業で協同組合が絶対必要だと言っている。その一方で当時、農業経済学講座には近代経済学の教員が多く、マルクス経済学を教えることができる教員がいなかった。そのため、農業経済学講座の学生も一緒にゼミを行い、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』等を読んだ。

1998年3月に九州大学を定年退職すると、南九州短期大学国際教養学科の教授として着任して7年間教鞭をとり、学長も2年間務めた。

2. 研究

◇林業の資本主義化に関する研究

林業においても両極分解が起こるが、林業生産の特殊性によって資本主義化は偏倚していくという問題意識の下で、資本力がある大規模林業経営に焦点を当てた研究に取り組んだ。

半田先生をリーダーとする科研グループでは、北川泉氏や農業経済学の先生たちと一緒に、1万ha以上を保有する大規模山林所有者である田部家、桜井家、絲原家を対象とした調査を実施した。同時期に大規模林業経営に焦点を当てた研究は、半田先生の研究グループだけだったように思う。田部家を何回も訪問して資料を見せていただき、収集した資料は科研のグループのみんなで共有した。

科研終了後、博士論文を執筆するために、大規模林業経営者の中では比較的小規模（数千ha）で、林業で資本主義経営を試行している典型だと考えた諸戸家を対象とした調査を単独で実施した。諸戸氏は大変紳士的な人で、調査中は別荘に泊めていただき、資料を見せてもらった。

これらの調査から、用材林業先進地域にある諸戸家では、利潤を林業へ投資して経営規模を拡大する一方で、用材林業後進地域にある田部家では製材業や合板業、桜井家や絲原家では自動車販売業や銀行業といった林業以外の産業へ投資を行っていることが分かった。資本主義化の進展に伴い、土地所有者は地主経営者になり、資本制的経営へと転化する。しかし、林業自体では資本主義化はせずに、地主的経営の性格を強く残しており、利潤を他産業へ投資することで資本主義化が進行していることを指摘した。

1970年及び1980年の林業センサスの分析からも、中規模層の両極分解が進んでいることを把握した。これらのセンサス分析は、集計票を用いたり、センサスで分からない範囲を個別調査したりして進めた。林業の資本主義化と大規模林業経営に関する研究成果と

して、拙著（1988）『林業経営の展開過程』がある。同著では、単なる地主的経営からは脱却しようとしているものの、林業経営だけで資本主義化するのは難しく、生産期間がきわめて長期であるという林業の特殊性（内部条件）と外材依存体制（外部条件）によってもたらされた林業経営の悪化によって、林業の資本主義化が押しとどめられていることを指摘した。

これらの研究を通じて主張したかったのは、大規模林業経営層は一握りであって、林業の担い手を考える時、家族労働による中小規模の農林家（農民的家族経営）の発展が大きな課題であり、林業だけではなかなか自立できないことを念頭においた農林複合経営の重要性についてである。拙編（1999）『流域林業の到達点と展開方向』では、林業の担い手としての家族経営とその存立形態である林業専門的家族経営や農林複合経営、小規模経営の存立に不可欠な協同組合（森林組合）の役割について言及している。

◇研究に対する姿勢

残念なことではあるが、小生は研究業績が少ない。しかし、学生の頃から雑誌「世界」、「思想の科学」、「朝日ジャーナル」をずっと購読し、いろんな論文を読んできた。事例研究も大事だが、自身の支柱となる理論がなければ「何の研究をしているのか」について聞かれた時に説明することができない。研究者として成長していくためには理論を身に付けることが必要だ。

小生の場合は、最初に理論装備したのが地代論だった。大学院の農業経済学の博士課程のそうそうたるメンバーもいる中、小生がゼミに行くと「門外漢が来たなあ」という感じで見られた。そのような中でも、小生は大内力氏の『地代と土地所有』を読み込んで理論を習得していたので、その理論を一貫して述べると勉強していない相手は動揺していた。当時、ある農業経済学者が「若い頃に基礎の理論をしっかりとやっていないと一定の年齢になると仕事ができなくなる。そこでマルクス経済学の理論をしっかりと叩き込んでおくと、それが宝になって仕事ができる」と新聞か雑誌に書いていたのが印象に残っている。それを教訓として基礎的な理論を大事にした。

また、読書を通じて、人間形成を図り、社会に対する自分の役割を知ることも重要だ。「農林複合経営を育成するためには森林組合が必要だ」ということを主張するために協同組合論や森林組合論をしっかりと勉強した。自分の持っている知識の全てが研究業績にはならないかもしれないが、自信を持ってやるためにも理論が必要だ。小生の場合は、地代論や農民層分解論がそれに当たる。論文にしなくとも、勉強したことは、どこかしらににじみ出てくるものである。そのような思考が最近少ないのではないか。目に見える短期的な業績のみを追求するのではなくて、現状を分析するためには、このような理論が必要であるということが分かれば、その理論をしっかりと勉強して習得した後に論文を書くという遠回りをする必要ではなからうか。

3. 主な学位取得者（取得順）

- ・佐藤宣子（現九州大学大学院農学研究院・教授）
「入会林野利用と集落構造に関する理論的並びに実証的研究」（1988年・課程博士）
- ・興梠克久（現筑波大学生命環境系・准教授）
「『担い手』林家に関する研究」（1996年・課程博士）
- ・堀靖人（現森林総合研究所・研究ディレクター [林業生産技術研究担当]）
「林業・森林管理の担い手の存在形態とその支援策に関する研究」（1997年・論文）

博士)

- ・山本美穂 (現宇都宮大学農学部森林科学科・教授)

「農林複合経営を中核とした林業における産地形成と森林組合の役割」(1997年・課程博士)

- ・渡辺昭治 (南九州大学環境園芸学部・名誉教授)

「林業基本法に基づく林業構造改善事業における国産材産地の形成に関する研究」(1997年・論文博士)

その中でも、学部の中から目立った佐藤さんは、小生が大学院への進学をすすめた。佐藤さんは問題意識も鋭く、院生は佐藤さん1人だったので2人でマルクス経済学を学んだ。興梠君は1年生の頃から「大学院へ進学したい」と言っていて、「実家の林業経営を中心に据えて分析し、家族経営を発展させたり、中規模所有層を安定させたりするためにはどのような政策が望ましいのかという研究をしたい」との問題意識を持っていたことをよく覚えている。それゆえ、マルクス経済学の勉強にもすんなり入ってきた。小生の林業センサスの分析も、興梠君が引き継いでくれている。

4. 組合活動とボランティア

小生の人生のもう1つの大事な側面は組合活動である。九州大学の教職員組合の執行委員長を1年半務め、九州地区大学高専教職員組合の委員長を5年務めた。島根大学農学部に着任後、すぐに組合の執行委員になって、それから教員生活の三分の二から四分の三は組合の役員をやっていたのではないか。大学院時代は「世界」等の乱読や、大学院生の会の役員をやっていたことが、組合活動に参加するきっかけになったと思う。

このような組合活動があっただけか、退職してから、安保関連法案や原発反対等の運動への参加が要請された。最近やっているだけでも、①安保関連法案の反対運動の実行委員会、②さよなら原発実行委員会のメンバー、③九条の会の福岡市西区の代表世話人、④福岡県自治体問題研究所の世話人(元副理事長)、⑤非核の政府の会の福岡県の代表世話人があり、退職後はボランティア活動に多くの時間を割いてきた。これらの活動がなければ、現在寂しい思いをしていたと思うし、活動を通じて少しでも社会貢献ができていたのではないかと思っている。

5. 若手へのメッセージ

最も重要なのは、実行はささやかでもしっかりと志を持つことである。志に従って日々の研究や生活、社会活動に取り組んでいくことが大切だ。年齢を重ねるごとに大きな志は小さくなってしまふ。しかし、若い頃に抱いた志は残っているものであり、これが日々の支えになる。そのためにも、若いうちに、自らの志を持つことが大切だ。志を持ったなら自信を持つことだ。自信を持つためには理論を身に着けることだ。それから信頼し得る師匠を持つこと。

これからの企業でも志を持った人が残ると思う。大企業でもダメになるところは、志を持った若い人を育てることができなかったからだ。どのようなリーダーを尊敬するのか、自分自身で選ぶことが必要で、研究でも企業でも良い師匠と先輩を持つことが大事だ。

小生の志は「人のため、世のため」で、林業経済の研究を通じて社会に貢献することであった。今は志を持つことも大変なことであるが、広い視野を持って社会を考え、自身の志を決め、それを失わないようにすることが大切だと思っている。

参考文献

深尾清造（1988）林業経営の展開過程．ミネルヴァ書房，300頁．

深尾清造編（1999）流域林業の到達点と展開方向．九州大学出版会，355頁．

インタビューを終えて（片山）

深尾先生へのインタビューでは先生の半生や研究などのお話を伺うことができ、非常に貴重な経験となった。また、このインタビューを通して、「志」という言葉が非常に印象的であった。この「志」は研究者としてはもちろん、一社会人としても非常に重要なものだろう。自分の核となる志を持つことで、社会がいかに変わろうとも、それに動じず自らの目標に向かって邁進できるのだと教えていただいた。

一方で、インタビュー中、様々な学者や論評、社会問題についてもお話しいただいた場面があったが、筆者の勉強不足で分からないことが多かったことが非常に悔やまれる。社会科学を研究していく上で、広く社会を知ることは重要なことであるため、これを契機により広く知識を蓄えていかなければならないと感じた。

末筆ながら、大変貴重なお話を頂戴した深尾先生に感謝申し上げます。

（文責：片山傑士・藤原敬大）